

# 一心寺かわら版

第三十七号 平成二十八年三月発行

ホームページ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

## シリーズ・葬儀を考える③日本仏教と親鸞聖人の葬送

日本において火葬は仏教の伝来とともにもたらされましたが、『続日本記』によると、仏教伝来より約百五十年後の文武天皇四年（七〇〇）、法相宗（ほっそうしゅう）の祖・道昭（どうしょう）が大和の栗原で荼毘（だび）にふされ、日本での火葬はこれより始まったと記されています。その三年後には持統天皇が火葬され、以後、多くの天皇が火葬されました。七五六年には、東大寺大仏を建立され、鑑真和上（がんにんわじょう）について法名（沙弥勝満）を授かるなど深く仏法に帰依された聖武天皇の葬儀が営まれ、獅子座、香炉、金輪幢、華幔などの供具が準備されたと記録されています。僧侶が葬儀に参加されたという記録は残っていませんが、七七忌には東大寺に遺品が納められています。仏教の葬法である火葬は天皇家を規範として、貴族社会に広まっていくことになりました。また、法隆寺の釈迦三尊や天寿国繡帳（てんじゅこくしゅうちょう）は聖徳太子の供養を目的としたものと考えられており、仏教と死者供養の関わりとしては飛鳥時代までさかのぼると言われています。



しかし、一般には火葬はまだ行われていませんでした。庶民の葬送と仏教の関わりは、平安時代動

乱期に山野に放置された野ざらしの遺体を念仏聖（ねんぶつひじり）が供養してより始まったと言われています。当時の仏教の目的は鎮護国家であり、僧侶は基本的に官僧でした。天皇、貴族を中心とした国家に従事するために存在し、穢れの忌避が義務付けられていたために葬送に関与することはできなかつたのです。官僧ではなく、そこから離れた遁世僧（とんせいそう）の出現により、次第に仏教僧が葬送に関わるようになっていきました。

平安中期以降には、釈尊が説いた正しい教えもそれを行じてさとり人もおらず、仏法が廃れて世の中が乱れるという末法思想（まつぼうしそう）を背景に浄土教が流行しました。地獄に墮ちるのを恐れ、浄土に往生するための行として、臨終行儀や没後の作法が整えられました。恵心僧都源信（えしんそうぜんしん・右写真）の二十五三昧講をその源流とし、『往生要集』にはすでに臨終の作法が見えます。それによると、無常院や往生院と呼ばれる建物を寺域の西辺に建て、堂中には金を塗った阿弥陀像を西向きに安置します。その仏像は右手をあげ、左の手中に五色の幡をもたせ、幡の端は地に垂らしておきます。病人が出ればこの堂にもなつて、仏像のうしろに座らせ、左手に幡の端を取り、仏にしたがって浄土に行く想いをおこさせます。看病人は焼香、散華して病人を莊厳し、念仏を勧めます。そして亡くなった者が出たときは、念仏して葬儀を営みます。



この時代は、慶滋保胤（よししげのやすたね）によって『日本往生極楽記』が著された頃で、往生思想が注目を集めはじめた時代でした。時の権力者、藤原道長も臨終にあたり浄土の作法を行ったと

され、有名な平等院鳳凰堂（下写真）も藤原氏が浄土を願って建てたものです。

そして鎌倉時代となり、法然上人の登場もあって、浄土教は一層庶民に広まっていききました。源信僧都、法然上人の教えを受け継いだのが親鸞聖人です。その臨終、葬送はどのようなものであったのでしょうか。

聖人の孫・覚如が記した『改邪鈔』（がいじやしょう）に以下のようにあります。

「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいでて魚にあたふべし」と云々。これすなはちこの肉身を軽んじて仏法の信心を本とすべきよしをあらはしませますゆゑなり。これをもつておもふに、いよいよ喪葬を一大事とすべきにあらず、もつとも停止すべし」。

親鸞聖人は生前に、「私が死んだならば、この体は鴨川（賀茂川）に流して魚の餌にしてください」とおっしゃられたと伝えています。つまり、遺体を大事にする必要はない、墓は必要ないと考えられていたということです。

たくさんの人々が病や飢え、戦乱によっていのちを失っていた時代です。現在の鴨川（右下写真）は人々がくつろぐ川辺ですが、当時はいたるところに死体が棄てられていました。聖人は、川に棄てられている方々と私は何ら変わることがない、どんな形で人生を終えようとも浄土往生には差し支えないということを示したかったのかもしれませんが、もう一つには、川に流す、魚の餌になるという行為自体を弔いと考えておられたのかも知れません。親鸞聖人は著作に「海」ということばをたくさん使っておられます。私たち



が生きる娑婆世界を「群生海」、浄土を「本願海」、「大宝海」、「大智海」と表わしておられます。そして「衆海に入りて一味なるがごとし」、どのような川の水も海に入れば一つの味になるとおっしゃられます。川に入って魚と一緒に大きい海のちの海（浄土）に流れていくという感覚があったのかもしれませんが、よくよく考えれば、命終わろうとする時に、盛大な葬儀をしてほしいとおっしゃらないだろうと思います。しかし、放っておけと言うのではなく、川に入れて魚に与えてほしいということに、聖人は謙虚に、しかしきちんと葬送ということを考えておられたのではないのでしょうか。



前号に記載したように、釈尊は、自身の火葬の方法を指示し、修行完成者のストウパー（墓）を建てなさいと説かれました。一方、親鸞聖人は、墓は必要ないという趣旨のことをおっしゃられました。では釈尊と親鸞聖人は相反することをおっしゃったのでしょうか。いえ、お二人は同じ思いを持たれながらも違う側面から説かれたのだと思います。

覚如は親鸞聖人のお言葉を受けて、次のように記しておられます。親鸞聖人のお言葉は、肉体に執着するのではなく、必ずお浄土に生まれさせると誓ってくださいだった阿弥陀仏への信心を大事とすべきで、喪や葬儀を一大事とするべきではないとお示しくださっているのです、と。

釈尊は、正しくさとりを開いたものの墓だと思つて礼拝することによって、人々の心が浄まると説きます。ですから、ただ墓を、

遺骨を拝むというのではなく、さとりを開いたもの、仏として拝むところに意味があります。

親鸞聖人の言葉の真意は、遺骨が私なのではない、私は浄土に往生する。遺骨を拝むのではなく、南無阿弥陀仏と称え浄土に生まれることが大事であると伝えたかったのでしょう。後に妙好人と呼ばれる念仏者・庄松同行は、「お前が死んだら立派な墓を造ってやるから喜べよ」と言われた時、「そんな石の下におらんぞ」と返したそうです。まさしく聖人の意を表しているように思います。

臨終、葬送の形はどうあれ、さとりを開かれた方である仏を拝むこと、南無阿弥陀仏と称えることを大事にしたということと、積尊と親鸞聖人は共通しています。

親鸞聖人は弘長二年（一二六二）十一月二十八日、九十歳で京都の三条富小路、弟・尋有（じんう）の寺である善法坊で死去しました。妻・恵信尼（えしんに）は、父から譲り受けた土地のある越後で四人の子どもたちと暮らしていました。京都には子息・即生房（そくしょうぼう）と末娘・覚信尼（かくしんに）が留まり、覚信尼が晩年の親鸞聖人の身辺の世話をしました。臨終には、尋有、覚信尼など側近の人たちが付き添い、また越後から子息・



益方入道（ますかたにゆうどう）が駆け付けました。翌日二十九日の葬儀には高田の顕智、遠江の専信など近しい念仏者が参列し、東山の麓、鳥辺野（とりべの）の延仁寺で火葬にし、翌三十日遺骨を拾い、鳥辺野の北、大谷に墓を造り納骨しました。親鸞聖人の墓は、一基の墓石に柵をめぐらせた簡素なものでした。そのお墓が寺院

化され、のちに本願寺になります。

結果的には、子どもや近しい念仏者たちは、親鸞聖人の残された言葉通りにはしませんでした。親鸞聖人のお心も、聖人を慕われた方々がお墓を建てた心情も理解できます。形は違いましたが、親鸞聖人のお心は人々に伝わっていたのではないかと思えます。聖人のお墓にお参りされた人々、浄土真宗のお寺にお参りされた人々は、聖人を偲ばせていただく中で、阿弥陀仏のお心に触れていったのではないのでしょうか。

さて、浄土系の葬儀は当初、念仏を称えるだけであつたと言われています。鎌倉時代より次第に仏教による葬送儀礼が普及していきますが、それに大きな影響を与えたのが禅宗です。その最も古い形は、宋において一一〇三年に編集された『禅苑清規』（ぜんえんしんぎ）に記されています。これは、真理を体得した僧と修行の途中で亡くなった僧の二つの葬法よりなっています。いずれも出家者が対象で、在家のものではありません。日本禅宗の在家葬法は、後者に手を加えてできあがっています。「没後作僧」（もつごさそう）と称して、形式上死後であっても出家の形にした上で、出家の印である戒名を与え、本来出家者に対して行った儀礼を行います。この禅宗の葬儀の方法は、宗派を越えて取り入れられていきます。例えば、死者の髪を剃る（＝出家の形にする）、戒名を与える（＝出家者のしるし）、戒名を記した位牌を安置する（＝儒教起源）など、現在仏式葬儀の典型と思われる行為の多くが、禅宗の葬法に起源を持っています。

応仁の乱以降、どの宗派も葬儀を行うことによって広まってきました。この時期に全国の町や村に多く仏教寺院が造られ、地域社会における一つの精神的中心となっていきました。また、日本仏

教は、伝道の過程で、日本古来の民俗信仰や地方の習慣などを取り入れ、結果的に釈尊当時の仏教とは異なるところのある日本独自の仏教が成立していきます。江戸時代には、いわゆる檀家制度によって、さらに仏教の葬儀が一般化されます。現代に見られる臨終や葬送の儀式、習俗もこの頃にすでに見られ、現代に引き継がれていきます。

このように見ていくと、葬送儀礼と、浄土往生や成仏を説く日本仏教とが結び付いたのは自然なことと思えます。続きは次回に。

### 仏教から生まれた日本語⑥ 「迷惑」

「他人に迷惑をかけないようにしましょう」などといわれるこの「迷惑」は、現代では不利益、不都合という意味に使われているようです。しかし、迷は本当の道に迷うことを意味し、惑は途方にくれてとまどうことを意味します。両方の字が示すように、この言葉も本来は迷いとまどうことを意味する仏教語です。

浄土真宗七高祖の一人である曇鸞大師は、念仏の真理に帰した目覚めと感動を尺取虫の喩えで語っています。尺取虫（下写真）は、葉や鉢の周りをぐるぐるとまわり続けます。決してふざけているわけではなく、身体全体をくねらせて一生懸命です。しかし、ついには年老いて力尽き命終わっていきます。人間の真相に目覚めたリアルな喩えでしょう。



どこまでも自我を主張して生きる人間は、それへの執着のため自我を超えた真理に暗いのです。だからいつまでも目先の利益にとらわれ、それがあたかも一番大切なものであるかのように錯覚します。例えば、学生であれば単位を取って卒業することに精を出す。就職をすれば会社の利益のために骨身を削って働く。その場そ

の場の目的に向かって一所懸命ですが、人生を貫く真理がわからないために、その全体が空しくいつまでも同じことの繰り返しで流されていくのです。

曇鸞大師は、お念仏によって真理に目覚め、このような迷いの人生を教えられ、念仏しながら、それを引き受けて生きてゆかれたのです。親鸞聖人も、「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して」と語り、深い懺悔と共に高らかに念仏して生きていったのです。

念仏の教えがなければ、迷いさえ気付かず、知らず知らずのうちに自分を傷つけ他人を踏みつけにして生きるほかはありません。このような自他を傷つけるという意味が転じて、この言葉が不都合という意味に使われるようになったのでしょうか。

〔仏教が生んだ日本語〕大谷大学編より編集

### 報恩講報告

一月十一日、宗祖親鸞聖人報恩講厳修。法話は古市正幸師（まんのう町・福浄寺）。

「南無阿弥陀仏」は阿弥陀仏からの呼び声。私たちが「お母さん」と呼ぶのは、お母さんの方から「私がお母さんですよ」と呼びかけてくれたから。家に帰って「ただいま」といったらお母さんがいて「おかえり」と返してくれた時の安心感。いつも私たちのことを心配してくれている仏さまがいらっしやる、だから間違いない浄土へ生まれることができる。その安心を受け止めるのがお念仏である、と聞かせていただきました。

当番講中の方々には、ご夫婦でお手伝いいただいた方が多くおられ、大変有り難いことでした。

